

池田大作の教育思想—女子教育の観点から（5） ——草創期の創価女子学園卒業生にみる女性の生き方と幸福観——

富岡 比呂子

はじめに

1. 調査概要

- ① 本研究の目的
- ② 調査対象・時期
- ③ 調査内容
- ④ 倫理的配慮
- ⑤ 分析方法

2. 結果

- ① 学園生活や女子教育についての質問
- ② 女性の生き方に関する質問

3. 考察・まとめ

- ① 女子教育の特徴
- ② 幸福観と全体人間への志向性

はじめに

本研究は、2009年より著者が行っている草創期における関西の創価女子中学・高等学校（以下、創価女子学園）の教育思想の研究の追加調査をまとめたものである。わが大学の創立者でもある池田大作（以下、池田と記す）と卒業生や教職員との関係、草創期の学園の様子などを通して、池田が女子教育に期待していたこと、女子教育の精神的基盤、また卒業生たちに共通して見られる特徴などについて、今までの調査結果をふまえたうえで考察していきたい。前回の調査^①では、主に中学1期、高校1期という草創期の卒業生を中心に、当時の学園生活の様子や創立者

^① 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（4）—」創価教育研究所『創価教育』5号、2012年、27-61頁。

との印象的な出会いや行事などについて聞き取り調査をおこなった。そのなかでは、創立者との出会いが対象者たちのその後の人生にいかに関与を与えたか、また学園時代に受けた薫陶が卒業後の彼らの精神的な糧となっていることについての様々な言説を見ることができた。今回は、前回紙幅の関係上扱うことができなかった、女子教育および女性の生き方について、主にとりあげて考察する。創価女子学園での記録を当時の在校生の観点から残していくことは、今後の池田思想の研究において有益な示唆が得られるものと考えられる。

1. 調査概要

① 本研究の目的

創価女子学園での経験を通して、卒業生の内面がどのように変化したのか、また、卒業後30年以上を経た現在、彼らが学園生活、また創立者をどのように意味づけているのかを探ることを目的とする。昨年の論文では学園の志望動機、創立者との出会いや学園生活の意味づけについてが主なテーマであったが、今回は同じ対象者に対して、女子教育の特徴および、卒業後の進路を含めた女性の生き方や幸福観に焦点をあてて考察する。本研究は質的・記述的研究であり、対象者自身の語りを基本にした分析をおこなう。

② 調査対象・時期

調査対象は、関西女子学園（創価女子学園）の草創期の卒業生9名。2010年9月から2011年11月にかけて聞き取り調査を行った。半構造化インタビュー方式で、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音を行った。インタビューはすべて個別に筆者が行い、かかった時間は一人当たり平均1時間～2時間であった。対象者のうち1名は関西在住のため、電話およびFAXにてインタビューを実施した。

③ 調査内容

インタビューガイド（表1参照）を用いて回答を得た。本人の自発的な語りによる自然な流れを重視したため、インタビューガイドにある質問項目以外にも出てきた対象者の語りも分析対象とした。質問会話の内容は、録音した音声ファイルをもとに逐語語録を作成してデータとして使用した。

④ 倫理的配慮

対象者には、調査への協力を依頼するにあたって、研究の目的及び方法を明示したうえで、研究への参加・辞退は自由意思によるものであること、答えたくない場合は答えなくてもよいことを伝えた。さらに、データは個人が特定されないよう処理し、データおよび録音したファイルは厳重に保管しプライバシーの保護を厳守する旨を明記した調査依頼書を渡し、口頭での説明をおこなったうえで調査協力の承諾を得た。

【表1 インタビューガイド】

【インタビューガイド】

1. 学園生活や女子教育に関する質問
 - a. 創価女子学園では女子教育に特有の指導はありましたか。
 - b. ご自身が受けた女子教育の良さをあげるとすれば、それはどんな点ですか。
 - c. 姉妹の連帯と言われる生徒同士、先輩後輩の関係について教えてください。
 - d. 教員の先生方との関係はいかがでしたか。
2. 女性の生き方に関する質問
 - a. あなたの幸福観を教えてください。
 - b. あなたのめざすべき理想の女性像はありますか。それはどのようなものでしょうか。

⑤ 分析方法

データ分析においては、対象者が語ったライフヒストリーを語られるままに記述し、構成した。そのため、結果の項の回答欄では「です・ます」体と「だ・である」体、また体言止めなどの表現が混在しているが、これは対象者の語りを忠実に表記したものと考えていただきたい。分析方法については、2010年の富岡論文⁽²⁾を参照のこと。

2. 結果

対象者の背景

調査対象者については表2に記したが、前回の調査⁽³⁾と同じメンバーである。期別は高校1期生（1973年入学）が5名、中学1期生（高校4期生）が2名、中学5期生（高校8期生）が2名の合計9名となっている。

① 学園生活や女子教育についての質問

ここでは、草創期の創価女子学園での教員や在校生の様子や、女子校という教育環境に見られる特徴について、対象者がどのように感じていたかについての語りを紹介する。

⁽²⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」創価教育研究所『創価教育』3号、2010年、18頁。

⁽³⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（4）—」、2012年。

【表 2 調査対象者のプロフィール】

表 2 調査対象者のプロフィール				
		期別	現在の職業	結婚前の職業
1	A	中 1・高 4	主婦	一般企業
2	B	中 1・高 4	同時通訳	外資系企業
3	C	中 5・高 8	翻訳	テレビ局プロデューサー
4	D	中 5・高 8	主婦	創価学会本部職員
5	E	高 1	主婦・日本語講師	一般企業
6	F	高 1	主婦・小学校講師	関西創価小教員
7	G	高 1	小学校校長	小学校教員
8	H	高 1	小学校校長	小学校教員
9	I	高 1	主婦	創価学会本部職員

a. 創価女子学園では女子教育に特有の指導や教育はありましたか。

これは、女子校という教育環境において、共学とは異なった気風や教育方針を当時の在校生が感じることがあったのか、またそれはどのような点においてなのかをたずねる質問である。教育の目的やめざすべき人間像といった点で、女性の特質に特化した教育理念や指導、共学の学校とは異なった視点が重視されていることも考えられよう。

「男子校にない指導ですか。躾とか、良識、健康、希望、やっぱりこれって、女子教育には欠かせないと思います。(女性)は) やっぱり産み育てる性だから、これがなかったら生きていけないし、子どもを育てられない。たとえば、友だちを見て、『私ってなんて不幸なの』なんて思わないもの。うらやむ、やっかむっていう感性がない、これが良識だと思う。女の子だから、女子だけの正解を大切にしてくださいってんだと思います。『鍛える』というよりは、『大切に大切に育てられた』という感じでしょうか。女の子はやっぱり大切に育てられることが必要なんですよね。愛情をかけて育てられたかというのは大事だと思います。」(A さん)

A さんの語りからは、創価女子学園のモットーでもある「良識・健康・希望」が女子教育の一つの大きな特徴となっているという視点が見られた。また他人に対する嫉妬などの感情についても言及していた。まだ精神的・肉体的にも発達の途上であり、外部からの影響に敏感であろう思春期に同年代の同性の生徒が集まれば、自然とお互いを比べたり、そのことによって嫉妬や羨望の感情が起ってくるのが考えられるが、創価女子学園にはそのような気風はあまりなかったであろうことが伺える。

また、A さんが学園時代に、自身が愛情をかけて大切に育てられたと感じていることが伺えた。家庭のような私的な環境ではなく、学校といういわば公的な環境においても卒業生がこのように感じていることは、当時の創価女子学園が情操教育の面でも豊かであり、かつ一人一人の生徒を温かく育もうとする受容的な教育風土を持っていたであろうことが示唆された。

「女性は、子どもに対しても純粋な愛情を注げるように、純粋に師匠を求めることができる。そう言い切れるのは女性のいい部分だと思う。」(Dさん)

「女性は幸福に、男性は勝利者にとというのは変わっていないと思う。今は女性の生き方が多様化してきているのではないかと思うんですね。結婚する人もいるし、しない人もいるし、それぞれの人生ですからと博正先生がおっしゃってくださったことがあります。」(Cさん)

「女性と男性への指導の違いについては、女性は幸福になるように、男性は勝利、偉くなることというのを重視されていた気がします。蜚会の指導ですが、恋愛、結婚についてなど、やっぱり卒業後の私たち学園生の行く末を心配なさって、きちんと生活するんだという指導をされました。『毎年指導していくんだ。どんな姿になっても、蜚会には戻ってくるんだよ』と言ってくださった。女性の生き方についてなど、男子学生とミックスではとてもできない指導をしてくださったと思う。結婚には経済的基盤が大事という話もありました。」(Eさん)

「やっぱり女子高なので、男性についての見方も、率直にお話してくださった。男性に騙されるような愚かな女性ではいけないという指導とか。一人の女性として、ものの見方、賢い生き方を見せてくださったんだと思う。先生から女性として、人として大事なことを学んだと思う。」(Gさん)

「(蜚会での結婚についての指導で)第一は経済力、第二に理解し合える、第三者に見てもらう、相手の家族を見る。恋愛至上主義じゃいけない、牛のよだれのようにだらだら恋愛してはいけないと言われて。いろいろな指導がありました。結婚には、友達みたいとか親子みたいなどいろいろな関係がありますよ。」(Hさん)

Dさんからは「純粋に師匠を求める」という語りが見られた。この場合の師匠とは、創立者である池田をさすのであろうが、女性の持つ純粋さについては、後述する女子教育のよさについての語りでも何人かの回答に見られた。

CさんとEさんの語りからは、「女性は幸福に、男性は勝利者に」と池田のメッセージ性が男女において異なるという観点が見られた。Cさんの語りにある「博正先生」とは、当時創価女子学園の教員をしていた池田博正氏をさす。「幸福」になるということについて、結婚という観点から女性の生き方が多様化してきている点が指摘されていた。

EさんとGさん、Hさんの語りは、蜚会という創価女子学園の卒業生の会での創立者の指導⁽⁴⁾に見られる。結婚について、池田は経済力と愛情および相互理解が必要であると指摘しており、恋愛の情熱に流され、一時の好き嫌いの感情で判断して将来を破滅させるよりも、第三者の意見も聞きながら賢い選択をするよう勧めている。結婚によって女性は自分の名前だけではなく、相手によってはその後の人生の方向性や生活形態が大きく変わる可能性を持っている。この指導には、そういった女性に少しでも幸福になってもらいたいという創立者の親心のような願いがあらわれているともいえよう。

⁽⁴⁾ 創価学園蜚会 編 『この道—蜚会総会創立者指導—』、創価学園蜚会、1985年、8頁。

「開学のときは女性の生き方に関するものが多かった。女性というものに対する先生のご指導があった。今は男女共学ですから、近年は明確に語学というものが強調されていると思う。今の社会、世界に必要なからでしょうね。親孝行についても出ていますね。でも、『親孝行』という人に感謝することは人間の基本、報恩の心が持てるか持てないかというのは大事ということだと思う。人間、他人には愛想よくできるけど、身近にいる家族に対してどうか。ここに心をかけられるというのは大切。」(Dさん)

「(大学との違いについてですが) 女子高の3年間は、『守られた、育てられた』という感じ。家族のように、何があっても守っていただいて。雛鳥があったかい羽根で守られてという感じ。大学に入って、一人一人が何をやるか、自分一人でどう貢献していけるのかを考えるようになった。高校卒業するのが嫌でね(笑)、2年生くらいから卒業するのが嫌だった。したくなかったですよ、本当に。学園は自分にとって二度とない空間であり、いつまでもいたい、どこにいても忘れないというのはありましたね。」(Gさん)

Dさんは、開学のときの指導と現在の指導との違いについて言及している。彼女の印象では、開学の時は「女性の生き方」についての指導が多かったとしており、こちらは前述の蜚会での恋愛や結婚に関する指導がそれにあたるであろう。現在は、東京・関西ともに創価学園は男女共学になっており、性別に特化した指導というよりは、読書の奨励や語学の習得といった具体的な能力やスキルの向上に向けられている点が指摘されている。また、池田が「親孝行」を強調している点についてもふれているが、こちらは「感謝することは人間の基本」という言葉にあるように、人に感謝することができる心根を重視した語りであり、身近な存在である家族に対してどれだけ感謝できるのかということが重要であると述べている。

以上をまとめると、良識、教養といった女性として身につけるべき資質についての指導や、女性としての生き方についての指導が多く、これらは女子学園生が卒業後に幸福な人生を送ることを創始者が願ったことだと考えられる。その池田の思いを対象者たちも感じている様子が「一人の女性として、ものの見方、賢い生き方を見せてくださったんだと思う」などの語りに見られた。

では、逆に東京の創価学園の男子生徒に向けられた指導との共通点については、どのような観点が指摘されているのだろうか。以下の語りが見られた。

「(指導について) 男子との共通点についてですが、これは『人間としての生き方』についてだと思います。師弟としての生き方、師匠を持つこと、これは全く同じだと思う。」(Aさん)

「師匠を持つこと」という語りが見られ、池田を人生の師匠として定める生き方については男女の差はないという見解が見られた。男子校・女子校を問わず、創価学園の生徒は創始者についてそのような考えを持っていたことを示唆する語りであるといえる。

b. ご自身が受けた女子教育の良さをあげるとすれば、それはどんな点ですか。

この質問では、創価女子学園が女子のみの教育を行っていたことに対する良さを、体験的に語

ってもらった。

「誰かからみてどうということではなく、お互いをまともに見られる。間に何か入るということはない。女じゃなくて、人間でいられる。異性の目を意識することなく。マナーとか恥じらいは、かえって女子校の方が低いことがあるけど。いろんな気遣いが不要だった。あと自立ができる。学校の行事は全部自分たちの手でやる。物事に男女の差別を一切つけなくて取り組める。男子がいたら、大工仕事なんてしなかったかも。逆にちまちましたことばかりしていたかも。」(Aさん)

「大学の途中で(在学中に)短大ができた。その入学式に出たときに、改めて女子教育独特の気風を感じ、これが大事なんだと思った。自分で受けてきた当時は、逆にわからなかったけど。私には合っていたんだと思います。男性がいると別の意識がはたらくけど、女子だけだと純粋に個性を伸ばしたり、切磋琢磨している感じがいい。いい意味でのびのびできる。自分を出しながらやっていける。社会はそれだけじゃ通用しないですけど。」(Dさん)

Aさんの語りからは、男性という異性の目を気にしないからこそ可能な「女じゃなくて、人間でいられる」という観点が見られた。あと、「自立できる」という点は、前回の卒業生への聞き取り調査でも出てきた回答⁽⁵⁾にも共通に見られていた。Dさんの「純粋に個性を伸ばしたり、切磋琢磨している」という語りに見られるように、女子教育のメリットとして、男子に頼らず、自立性・主体性を発揮できる点が強調されているといえよう。

「純度が高まる感じ。教員の先生方も創立者を求めている。個人的には、中学の時は共学だったので、女子校ってなんてのびやかでいいんだろうと思った。自立するという部分もありますね。居心地は最高によかったですね。」(Eさん)

「やっぱりね、男子がいると男性の理論と違ってあるじゃないですか。女性の部分とときどき合わない。たとえば、女子の純粋な部分を理想論だと批判された時は、『何?』ってカッチーンときたりね(笑)。要するに、女性としての見方とか純粋なところをきちんと女子教育として、大事だと教えていただいたのはよかったと思います。共学で刺激を受けることも大事ですが。でも、中学・高校の時期って異性関係が関心あるときだしね。自分の考えが固まる前に、相手の意見に流されたり依存してしまう危険性がありますよね。女子校の場合は、自己建設での葛藤や悩みがありますが、他人に流されるという意味ではない。本当に、野性児のように自由にさせていただいていたと思いますよ。先生たちも指導しやすいんじゃないかと思いました。」(Gさん)

「今振り返ってみると、あの3年間で、女性とはこうあるべきという、女性の潔癖性とか純粋さ、一途さなどの特性のしつけ糸をつけてくださったのかなと思いますね。女性は男性にだまされやすいからと、このことばかり先生がおっしゃっていたんです。このことは残っていますね。」(Hさん)

Eさんは「純度が高まる」と表現していたが、これは創立者への思いという点においてだと考えられる。創立者の池田を師匠として求める姿勢が、同性のみであるという点、また教職員も同

⁽⁵⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(2)—」、33頁。

じ姿勢を示していることでより団結しているように感じている点を「純度が高まる」という言葉で表現しているのだと考えられよう。また「のびやか」「自立する」という点は前述の語りとも共通していた。

Gさんは男女関係の問題を持つことによる相手への依存や自己形成のうえでの弊害について指摘している。彼女は、異性がいなくて「自分の考えが固まる前に、相手の意見に流されたり依存してしまう危険性」を回避できたことのメリットについて述べており、他者にわずらわされることなく、純粋に自己形成の問題について悩むことができたことが女子教育のメリットであったと指摘している。

女性の持つ純粋さについては、Gさんの「女性としての生き方とか純粋なところ」、Hさんの「女性の潔癖性とか純粋さ、一途さ」という語りに見られた。当時の女子学園生が、純粋な思いで学んでいたことを示唆する語りといえよう。

「女子教育が成功したかどうかは、私たち次第で決まると思う。『大阪に女子教育ここにあり』と言われてたかったんだろうなと思います。最初は失敗だったかも、勉強しない、感情に流されやすい、泣いて誓い合うけど実際どうなんだみたいな（笑）。具体的に動いているのかみたいなね。まだ実例が少ないわけですね。先生は何回も激励されているのにね。共学になった時点で、あ、女子教育失敗だったのかなと思った。」（Hさん）

「環境が良かった、自然環境。若いころにいい環境で育ったら、それが40代50代に出てくるよ、と（先生が）おっしゃった。」（Fさん）

Hさんの語りの中には、女性の「感情に流されやすい」という特性についての言及がみられた。彼女は、「女子教育失敗だったのかな」という言葉で、当時の自身のことをふり返って反省しているようであった。Fさんは自然環境が豊かであったことについて述べており、これについては他の回答者も自然が豊かな場所で学べたことは思春期の心身面の成長にとって良い影響を与えたと語っていた。池田は、第6期生入学記念昼食会のあいさつの際に「どうか、新入生の皆さんも先輩によくついて、一人も落伍者がでることなく、見事に全員がこの学園から巣立っていただきたい。この学園で育っていった場合には、四十代になったときに、優れた心豊かな、福運にみちた勝利の人生が待っているということだけは、私は絶対の確信があります。一番大事な人生の総仕上げの時に勝てる基盤を、今、作っているのです」⁽⁶⁾と述べており、風光明媚な場所に建設された創価女子学園での生活が、卒業生のその後の人生にも関わってくるであろうと励ましている。

c. 姉妹の連帯と言われる生徒同士、先輩後輩の関係について教えてください。

「『もしこの友情の連帯が21世紀まで続いたら、奇跡だね。』とおっしゃって、そして21世紀になり、

⁽⁶⁾「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、学校法人創価学園、1982年、288頁。

私たちが40代、50代になっても続いているから、奇跡の連帯なんです。」(Aさん)

「女性は自分がいろいろ変わる。縁に粉動されざるを得ない。結婚すると名前も変わり、自分自身のアイデンティティが揺さぶられる中で、なかなか友情は続かないもの。女性はほとんど借り物、夫、親、子どもなど借り物によって自分を規定することが多いから、かつての自分を知っている人に、それを見せられないと思う人もいる。『絶対蜚会に戻っていらっしやい』と先生が言った意味が、40代になってわかった。黄金の思い出を共有している人は世界に150人しかいないわけだから。あの時期を共有していたということは大きい。」(Bさん)

「誓いの言葉を述べるときに、男子校での先生のご指導や(創価)学会の女子部への指導を色々勉強したんです。その中で女性の友情は儚いという、生命の傾向性の悪い部分、つまり主人や子どもによって変わってしまうという部分があることを知りました。女性の友情は宝だから、これが続いていくといいという指導がありました。でもその当時は、その本当に意味するところがわからなかったから、ただ『はい!』と言っていた。でも、卒業すればするほど、このことが大事だと思う。子どもが東大だろうが、高校中退だろうが、主人が弁護士だろうがなんだろうが、関係なく仲良くできる。相対的な幸福ではない。人生は山あり谷ありだから、何かあれば励まし合えるという人間関係を持っているのは素晴らしいと思う。奇跡の連帯があることがありがたい。」(Fさん)

「みんな仲が良かった。一番多感な時期の3年間、6年間を一緒に過ごしたことは、縁だね。切っても切れない関係、ずっと続くだろうね。そのときのそのまんまのその子を知っているから、今たとえお金持ちだろうが、病気だろうが、太ってようがやせてようが、関係ない。喜びは100%喜んであげられる。おとぎ話のような3年間。いつでもその頃に戻れるの。昨日のこのように戻れる。」(Aさん)

Aさんの語りに見られる池田の言葉は、以下の指導に見られる。池田は昭和53年の第三回蜚会の総会で、卒業生の連帯を21世紀まで残したいとの思いを以下のように述べている。「この蜚会を世界一の伝統ある福運に満ちたものとして、二十一世紀に残したい。(中略)もう自分はだめだと思う人がいて、蜚会に出ない人がでるかもしれないが、それは臆病です。卑怯者です。とにかくこの連帯を二十一世紀の奇跡としてつくりあげたい。」⁽⁷⁾ この言葉から、池田がいかにこの卒業生同士の絆を後世に残るものとして重視していたかが伺える。また、この連帯を「二十一世紀の奇跡」と称するところから、卒業生たちが「奇跡の連帯」と言うようになっていたのだということもわかった。

Bさんは、女性の生き方として、「女性はほとんど借り物、夫、親、子どもなど借り物によって自分を規定することが多い」と述べており、女性が自身のアイデンティティを決めるよりどころが時と場合によって変化しやすいことを指摘している。その中で、自分そのものを見てくれる存在が大切であるからこそ、中学・高校の友人というものは、飾らない自分自身を開示できる貴重な人間関係だと考えられよう。FさんとAさんの語りに見られるように、自身に付随するもの(夫の社会的地位や子どもなど)ではなく、本人の人格そのもので向かい合う人間関係というものは、いわば利害抜きのものであり、中学・高校時代ならまだしも大人になってからであれば、

⁽⁷⁾ 創価学園蜚会 編 『この道—蜚会総会創立者指導—』、5頁。

容易に築くことは難しいと考えられる。その点で、創価女子学園時代を共に過ごした卒業生たちは、そういった一個の人間としてお互いに向き合い、接することができることが素晴らしく、この関係が卒業後も続いていることを「奇跡」と称したのではないかと筆者は考える。

池田は第7回卒業式の指導で「人生にとって、友達ほどすばらしい宝はないでしょう。また、よきたくさんの友人を持つ人こそ、幸せな人ではないでしょうか。園子の友情、園子の絆はかならずや年輪とともに光り輝くことと思います。そのよき友情の芽を、これからも大切に伸ばしてください。」⁽⁸⁾と述べており、友情の大切さを強調している。第8回入学式においても「『友人は第二の自己である』という有名な言葉があります。また、『友人を見れば、その人のことがわかる』ともいわれております。良き友人を持つことが、どんなに大切なことかを示している言葉です。友人をつくり、友人と心から交わっていくなかに、自分自身が磨かれ光り輝いていくことでしょう。どうか、この尊い青春の三年間、美しい自然の交野の地を舞台にして、生涯、崩れない友情の思い出を、皆さん方の胸中にしっかりと刻んでいただきたいと思うのです」⁽⁹⁾と、良き友人を持つことの素晴らしさを訴えていることから、創立者の女子学園生への願いが感じられよう。

「当時の学園は…うるさかった。にぎやかで仲良かったと思います、私の学年は。先輩後輩の関係もよかったと思う。寮ではおふとんが重なるくらい、本当に家族みたいだった。よく6年暮らしたなと思う。距離が近かったし、本当にいろんなことがあった。」(Cさん)

「仲は良かったと思いますよ。寮の部屋は5人部屋で、中2から高3までシャッフルして、半年ごとに部屋替えをするんです。先輩が後輩の面倒を見るという伝統が学園にはありました。(自分の期について)この学年はとても仲が良いんです。期の団結が強いので、未だに何かあったら集まるんです。」(Dさん)

Cさんの語りからは寮生活でのエピソードが紹介されており、そこで先輩と後輩が同じ部屋で生活をしていたことがあげられている。Dさんからは、寮生活の様子や、同期のメンバーが卒業後も仲が良く、今でも何かあったら集まるという語りが見られた。

「常に妹たちのためにと思っていた。」(Hさん)

「後輩は先輩を『お姉さん!』と呼び、先輩は後輩を『妹たち!』と心から親しみをもって、声を掛け合い、励ましあっておりました。寮生・下宿生・通学生・クラブ活動それぞれの場面で、絆は深められていきました。」(Iさん)

Hさん、Iさんは、先輩と後輩の関係を「姉妹」という形で表現しており、開学間もない創価

⁽⁸⁾「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、257頁。

⁽⁹⁾「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、255頁。

女子学園における生徒同士の強い連帯を示唆する語りとなった。

d. 教員の先生方との関係はいかがでしたか。

これは、開学当時の教員と生徒との関係についての質問である。今までの卒業生へのインタビューでも、親身に指導をしてくれた教員についての語りが多く見られていたが、今回は以下のような語りが見られた。

「中一のと看、担任の末広先生がわざわざ東京の実家まで家庭訪問に来てくださったのが印象深い。母親も驚いていました。先生と生徒の距離は近かったですね。寮の担任の松本待子先生が心配してくれました。いろんな先生に見守っていただいたんだと思います。」(Dさん)

「原田先生ですが、当時はとても厳しかった。私は当時、学校新聞の副委員長をやっていて、原稿を募集したり、自分が原稿を書いたり、ガリ版刷りで大変だった。原田先生はそれを見てくださった。原田先生は昔(聖教)新聞社にいらした方だし、国語の先生だから、厳しく訓練してくださったんです。また、身近な一つのロールモデルとして、原田先生が池田先生を求める姿を強烈に教えていただいた。(彼女からは)新聞作りだけじゃなくて、色々学びました。新聞は、池田先生が『僕が愛読者だからね』と言ってくださって。」(Eさん)

Dさんからは、わざわざ大阪から東京の実家まで家庭訪問に来た教員の話があげられ、そこに一人ひとりの生徒を大切に思う教員の姿を伺うことができる。Eさんからは、原田秀子元教諭と新聞委員会についての話が出てきたが、新聞委員会については、去年の富岡論文⁽¹⁰⁾でもさまざまな語りが見られた。池田が創価女子新聞の愛読者となった話についても語られており、Eさんにとって、そのときの思い出が深く心に刻まれている様子が伺えた。

「ある先生は、下宿に来て、夜も指導に来てくださったり。いろんな先生がそれぞれの役割を持って支えてくださった。」(Gさん)

「よく面倒をみてくださった。生徒の私たちは、何をするにも伝統を作るのは私たちだ。全員が創立者、学園建設の一人で、先生と同じ思いでと思っていた。」(Hさん)

「担任の先生方は何でも相談にのってくださる方ばかりで、創立者池田先生のもとでは教師と生徒というより、むしろ同志という関係性であったように思います。創立者を中心とする兄弟・姉妹の延長の一番先頭に先生方が走っておられたという関係であったように思います。」(Iさん)

GさんやHさんの語りからは、教員が細やかに生徒の様子を気遣い、支えていた様子が伺える。生徒としても「全員が創立者、学園建設の一人で」、また「先生と同じ思いで」との気概を持って毎日の学園生活を送っていたことが伺えた。

⁽¹⁰⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(4)—」、46-48頁。

次のIさんの語りの中で興味深いのは、「教師と生徒というより、むしろ同志という関係性」であったとの表現である。教員も生徒も同じく創立者の池田を師匠と定めていく姿勢が共通していたという点が「同志」であったと彼女が感じている理由の一つでもあるのであろう。

創価女子学園の開学の時の話は『新・人間革命』に見ることができるが、そこでは、教員と職員が開校準備を進めている様子が綴られている。

「伸一は、学校の建設には『豊かな自然環境』と『近代的な教育設備』、そして『情熱ある教師陣』という、三つの条件が必要不可欠であると考えていた。

自然環境も、教育設備も申し分なかった。あとは創立の精神に共鳴し、教育に命をかける、情熱あふれる教師が集うかどうかにかかっていた。

一切は人で決まる。教師こそ生きた最大の教育環境である。

伸一は“わが創価女子学園に、よき教師よ、集い来れ！”と懸命に祈った。」⁽¹¹⁾

ここから、いかに池田が創価女子学園の教職員の採用に心をくだき、自然環境をはじめとした立派な教育環境を生徒たちのために準備したいと考えていたかが伺える。創立者である池田、教職員、そして集った生徒が一丸となって、全力で開学当初の創価女子学園の建設に取り組んでいたことが推測される。

② 女性の生き方に関する質問

a. あなたの幸福観を教えてください。

この質問は、前回の卒業生への聞き取り調査でも行ったが、「幸福とは何か」という抽象的な意味と、「何をしているとき幸福だと感じるか」という具体的な回答、どちらも含めた形となっている。下記のように、さまざまな回答が見られた。

「『何が幸せかを知ること』が一番の幸せだと思う。幸せを感じられることが幸せ。子どもの頭が悪くたって、その子が生きているだけで、そこにいてだけで幸せ。幸せを感じる感受性を強くすることが大事だと思う。どんな状況にあっても、他人との比較でなくて、『幸せだ』と思える、自分自身を築いていくことが大事。不幸な人は、どんな状況でも不幸。あと、現状を良くすることも大事。目先のことにあんまり左右されないで、こうやって頑張れることが幸せ。やるべきことがあること、人の役に立てることは最高の喜び。先生が私たちを喜ばせてくださった。今度は私が、自分の周りにいる人をこれからどれだけ喜ばせていけるかなって、老後までそれが楽しみ。」(Aさん)

「女性にとって負けないことが幸せ。青春時代の夢のような思い出を作ってくだったので、そのあとのドロドロの現実、だんな子どもだ仕事だっていうことも乗り越えていける。清き心をどうして培えたか、学園で何を言われても何をされても負けないという精神を培ったのは大きい。何より先生ご自身が身をもって証明してくださっている。」(Bさん)

⁽¹¹⁾ 池田大作 『新・人間革命』第17巻、聖教新聞社、2007年、120頁。

「負けないことじゃないですかね。5年前に、(夫に)ガンが再発して、同時に私も胃ガンということになったんです。娘が(創価)学園の寮に入って、両親が病に倒れたことで学校に行けなくなりました。その後私が手術して19日間入院、そして4週間後には、リュックしょってバングラディッシュに行ったんです。あそこの家を引き払わないといけないと思って。夫の入院手続きにも間に合わないと思って。」(Fさん)

「365日毎日が幸せっていう日はないんじゃないかなって。でも、克服していく中に生きがいを感じていけることが幸福なのかなと。ひとつのものを乗り越えてやったという達成感。毎日苦しくて大変でも、下降ではないと思う。少しずつ上がって行ったり、上がった下がったりですね。学園生は不幸にならないと先生がおっしゃってくださったので、そうなんだろうと。究極の楽観主義ですね(笑)。」(Cさん)

Aさんは「何が幸せかを知ること」、「現状を良くすること」が幸せにつながると述べ、「どんな状況にあっても、他人との比較でなくて、『幸せだ』と思える、自分を築いていくこと」が大事だと強調している。このことから、幸せとは他者との比較や優劣によって決められるものではなく、自分自身で築いていくものであるという考えが伺える。また、「やるべきことがあること、人の役に立てること」は「最高の喜び」であるとの言葉もあり、人の役に立つことという観点がみられた。

Bさんは「負けないこと」、Cさんは「克服していく中に生きがいを感じていける」ことが幸せと指摘している。Fさんも家族や自身の病気の体験を通して「負けないこと」が大切だと語っていた。「負けないこと」については、一昨年の創価女子学園の元教職員へのインタビュー調査⁽¹²⁾でも同じような回答が見られた。

Cさんの「365日毎日が幸せっていう日はないんじゃないかなって」という語りは、以下の指導に見られた。池田は、第3期生の入学記念撮影の際に、健康・良識・希望という3つのモットーについて言及しているが、なかでも希望について以下のように語っている。

「喜びというものが、三百六十五日同じように続くことは絶対にない。また二年、一生続くことも絶対にありえません。瞬間瞬間苦しんだり、悲しんだり、悔しがったり、楽しんだり、というように、気流みたいに生命のなかで動いていくものです。それを私は『生命流(生命の流れ)』といったことがありますけれども、これが人生の実相です。

したがって、寒い冬であっても、その冬を耐え忍んでいける強い自分であるならば、かならず春がやってきます。雪があり、台風があったとしても強い自分であれば、また聡明であるならば、じっとこらえて未来を静かに待ち、太陽の出るのを待てる。またそういう太陽の日がかならず来る。反対に、愚かな人、哲学のない人、聡明でない人は、挫折してしまいます。つらいことがあり、悲しいことがあると、自分自身に負けて世界が真っ暗になってしまいます。

このように大きく女性の人生の路線を考えた場合に、一つは、どんなことがあっても希望をもって前

⁽¹²⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(3)—」創価教育研究所『創価教育』4号、2011年、187頁。

に進んでいける、希望と幸せの路線。もう一つは何かあると挫折し、いつもいつも悲しみ、悲哀に自分自身が負けた、希望のない路線と、この二つしかありません。

したがって、どういうことがあったとしても、かならず希望をもって立ちあがる、希望を抱いて前に進んでいく、自分自身に挑戦していく、ということが三つのモットーの概略であります」⁽¹³⁾

この指導から、どんな困難にあっても希望を持って生きていくことの大切さが強調されており、女性の生き方として、希望、哲学を持つこと、また聡明であることの重要性が示されていることがわかる。また、「学園生は不幸にはならない」という語りは、1976年の全校集会での話と1978年の第6回希望祭においての指導で述べられており、2010年の富岡論文⁽¹⁴⁾で紹介されている。

「今も追い求めつつある幸福ですけど、私の悪い癖は周りの人に感謝できなくなるときがある。いろいろやってくれる人、主人や子どもに感謝できることが幸せ。(私の)母は活動で忙しい人だったんですが、帰ってくるたびに『お留守番、ありがとう』と言ってくれた。私はこういうことができなかったなど。常に物事にありがたい、ありがたいと思えるようになりたい。日々渦中かな。」(Dさん)

Dさんは、自身の母の姿を通して日々の生活の中で「感謝できること」が幸せであると語ってくれた。

「先生の『太陽に向かっていくんだよ』という言葉で、私の幸福観が変わった。人間は力、勉強で人間決まっていくのかなと思っていたんですけど、学園のモットーに良識、健康、希望とあったり、5項目もしつけとか、『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』だったり。力とかではない、福運といいますか、女性の豊かさや精神的なもの、まるさが大事だと思いました。先生が40代、50代が大事といつも言われていたが、それを目指していかなければならないと思った。ふり返ってみて、自分がその世代になってみると、やはり福運は大事だと思いますね。学園では、幸せとは何かを教えてくださいました。これで自分だけでなく周りも幸せにしていける。本当に幸せとは何かを教えてくださいましたと思います。」(Eさん)

Eさんの語りにある「太陽に向かっていくんだよ」という言葉は、一昨年元教職員へのインタビュー⁽¹⁵⁾でも見られたが、創価女子学園の創立五周年記念式典での池田のスピーチに見られる。また、「福運は大事だと思いますね」という語りにある、福運については、以前の調査でも他の卒業生から同じような回答⁽¹⁶⁾が見られた。

「一番の幸福は、人に頼らないということ、幸福は自分が勝ち取るものだから。女性は誰かに頼っていきたい性分を持っていると思うけど、女性が幸せになるには自立して、自分で幸福をつかむということだと思います。自分自身に、自分の使命に生きることがいかに幸せな気持ちになるかということだ

⁽¹³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、263-264頁。

⁽¹⁴⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から (2) 一」、25-26頁。

⁽¹⁵⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から (3) 一」、174頁。

⁽¹⁶⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から (2) 一」、27-28頁。

と思います。」(Hさん)

「私の幸福観も他人の幸福を喜べることが自身の幸せであることを実感いたします。『一人も残らず幸せに』『目の前にいる一人の人を心から大切に』この戦いが、世界を平和にする道であると確信しています。」(Iさん)

Hさんの語りからは、幸福は「自分が勝ち取る」「自分の使命に生ききる」という観点が見られた。池田は、昭和51年の生徒代表との懇談会で「人というものは、どうしても他人が良く見えるものです。他の環境が良く見える。あこがれてしまう。それは錯覚です。(中略)したがって、あの学園、あの学校、あの家庭はいいなあ、などと思うことよりも、自分の人生が、自分の今いる所が一番大切なんだ、そこしか真実の幸福の花を開いていく所はないんだと、決心することが大切です。自分の今いる所以外に幸福は求められない。自分が今いる所で挑戦する以外に、偉大な黄金の人生はないのです。」⁽¹⁷⁾と語っており、幸福といっても、どこか遠くに求めるのではなく、あくまでも自分の今いるその場所で挑戦することによってのみ獲得されるという観点を示している。また、「幸福というものは、決して遠くにあるものではありません。どこかに行けば、きっともっといい所があるだろうと思うところに、人間の大きな錯覚がある。人生の大きな過ちがある。派手やかに生きた人、これは朝顔のようなものであって、時が来れば必ずしぼんでしまいます。イギリスの諺に『有名と鏡は息を吹けばすぐ曇ってしまう』という有名な言葉があるけれども、真実の幸福は無名の地道のなかにあるというのが、私の人生の結論です。けっして焦らないで、気高い女性として一生涯を生きてもらいたいのです」⁽¹⁸⁾とあるように、一瞬の華やかさよりも地道に自らを鍛えることに幸福があるという点を強調している。

Iさんからは、「他人の幸福を喜べる」ことが幸せであるとの語りが見られ、人のために尽くすことに価値を見出している様子が伺えた。同じような回答は、以前の調査⁽¹⁹⁾でも他の卒業生から見られており、このような利他的精神は卒業生に共有される創価女子学園の一つの美德とも考えられる。

b. あなたのめざすべき理想の女性像はありますか。それはどのようなものでしょうか。

この質問は、女性の生き方や理想像についての問いであり、回答には対象者たち自身の生き方や価値観も反映されていると感じられた。

「男性には男性の生き方、女性には女性の生き方があります。『希望の乙女』像、フランス人形・園子ちゃん、モスクワ人形・モス子ちゃん等、創立者より贈っていただいたお人形やブロンズ像を通し、女性の理想像として、香峯子夫人を模範にという生き方が定まりました。」(Iさん)

⁽¹⁷⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、276頁。

⁽¹⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、276-277頁。

⁽¹⁹⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(2)—」、35頁。

「奥様。常に心を配って感謝されて、人に笑顔を送る。何があっても動じない、受け止めて前に進んでいける。」(Dさん)

「奥様のように良識、健康、希望を備えた女性になりたいって思う。心から湧き出るような品格、優しさがあ、若い人たちの成長を応援できる女性、大きな意味で、育てていける女性になりたい。」(Aさん)

「きつと(池田)先生は奥様みたいな女性を求めてらしたんだろうなと思います。仕事と主婦、どちらを選ぶかは個人の問題だから。人間の生き方として、女性には和を保つことが大事だと思う。大きな話になりますが。私の友人も独身で仕事がんばっている人もいるし、それはそれで人権が守られるべきだと思う。個人の自由だと思う。先生の指導は、粹にあてはめるようなものはないと思う。私自身は、まわりに粉動されずに、自分で幸福になっていく女性にと思っていました。時代によっても、求める女性像は違うけど。」(Cさん)

Iさん、Dさん、Aさんからは池田の妻である香峯子夫人についての語りが見られた。彼女を良識や品格を備えた女性として一つの目標にしている様子が伺えたが、こちらは他の卒業生へのインタビュー調査⁽²⁰⁾でも、同じような回答が見られている。Cさんからは「女性には和を保つことが大事」であるという観点が見られた。また、池田の指導は「粹にあてはめるようなものはない」という点もあげられ、女性としてというよりも、一個の人間としての指導が多かったことを伺わせる語りとなった。

「原田先生は一つのモデル、理想となるかわからないけど、ちょっと先を歩いてくださっていた。ずっと上という感じではなく。一つの女子教育のロールモデル。私たちの少し前を進んでいかれている感じだった。」(Bさん)

Bさんからは、前述の新聞委員会の話でも出てきた原田元教諭についての語りが見られた。彼女と当時の女子学園生とは10歳くらいの年齢差となり、少し年上の女性として、一つのロールモデルの役割を果たしていた可能性が示唆された。

「50代になって人間としての力が一番大事ということがわかった。人間としてどれだけ周りに影響を与えていけるか、きちんとした思想を持って、きちんと行動できることがどれだけ大切か。ちゃんと学園時代に学んだことを発揮していけばいい。在学中から、先生が世界に出て、世界にも飛び出していくような女性にと言われていたので、そういう思いは結婚するときにもあった。世界平和の役に立つような、微々たる存在ですけど、先生の思いを受けて、娘であり弟子として、自分も弟子の一員として先生の思想を広めて行けるような人間になりたいと思った。」(Eさん)

「基本は庶民のために戦うリーダーになってほしいというのがあると思う。社会で活躍することももちろん大事だけど。女性は、社会的立場がなくても、庶民の幸せのために力を注げる人生が尊いと思う。

⁽²⁰⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から (2) —」、37頁。

人間は方向性は2つある。男性は横の方向、社会に広く影響を与えていける。女性は教育者として母として、縦の方向、つまり世代を超えて影響を与えることができる。それは家族に限らず、地域の青年や子どもであつたり。これも大事だと思います。」(Fさん)

Eさんからは、「人間としての力」という観点があげられ、人としてどれだけ周囲の人に良い影響を与えていけるかが大切だという語りが見られた。同じように、Fさんは「庶民のために戦うリーダーに」という点をあげており、自分のいる地域社会において周囲の人々に尽くすことのできる女性を一つの理想ととらえていることが伺えた。「庶民のリーダー」という観点は、元教職員へのインタビュー調査⁽²¹⁾でも同じような回答が見られており、この視点は、創価学園の開校時の池田の指導にも見ることができる。池田は「創価学園は、あくまでも日本の未来を担い、世界の文化に貢献する、有為の人材を輩出することを理想とするものであり、それ以外のなにもないことを断言しておきたい」⁽²²⁾と述べており、この精神はそのまま創価女子学園にも受け継がれていると考えることができよう。また、Fさんの男性は横に、女性は縦に影響を与えることができるとの、男性と女性の方向性の違いについての話もとても興味深かった。

「この人を見ると本当に安心する、勇気が出る、明るくなる、居心地がいい、という女性としての特質ってありますよね。それを発信して、周囲を幸福にしていけること、それが出せる人。ちゃんと芯がある振る舞いのできる女性はいいなと思いますね。」(Gさん)

Gさんの語りに出てきた、周囲を幸福にしていける人という観点だが、池田の指導にも同じような表現が見られた。池田は第4回卒業式において、卒業生に以下のようなはなむけの言葉を送っている。「新しい旅立ちにあたって、いつまでも、いずこにあっても、どうかその美しい笑顔を忘れることなく『この人の明るい姿を見てみると、いつも希望の風が吹いてくる』といわれるような人になっていただきたいと念願しております」⁽²³⁾この言葉からも、周囲に明るく、良い影響を与えることのできる女性に育ってほしいとの創立者の願いが感じられる。

「トータル的にいうと、人のために役立つ人間になりたいと思う。自分が幸せじゃないと人を幸せにできないと思う。人のために役立つことが生きがいという女性になりたいと思う。後輩のために自分の生き方を示す、後輩のために生きていく、こんな人を望んでいるんだと思う。後輩が安心して相談して、道を進んでいけるような。」(Hさん)

Hさんからは「人のために」「後輩のために」役に立つ人間になりたい、という語りが見られた。後に進む後輩たちのための道を開こうとする責任感と使命感が伝わってくる語りであり、こ

⁽²¹⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(3)—」、188頁。

⁽²²⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、6頁。

⁽²³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、248-249頁。

のような自分よりも人のためという利他的精神が前述の幸福観についての回答と同様に見られた。

ここで、理想の女性像と関連する語りとして、1期生の卒業時の指針について言及した語りがあったので紹介したい。

「先生からは（理想の女性について）蜚会の指導などでいただいていたと思います。でも社会に出ると、低い価値観ばかりじゃないですか、他人の足をひっぱるような。でもこの心が美しい人だ、心が強い人だということは、やっぱり求めていかなければならないんだと思います。所詮理想論と言われても、みんな求めていると思います。理想の女性像ですが、これは卒業の時の指針ですね。いかなるときも蓮華の花のごとき美しき心だけは勝ち取れという。」(Gさん)

「美しき心だけは勝ち取れ——の言葉。これは師匠の弟子に対する気持ちですね。」(Hさん)

ここで、理想の女性像の一つとしてGさんやHさんから「美しき心の人」という語りが見られた。これは、1期生が卒業時に創立者から贈られた「園子よ／いかなる厳しい生活と／社会の中にあっても／蓮華の花の如く／美しき心だけは／絶対に勝ち取れ」⁽²⁴⁾という指針である。ここでいう「美しき心」を保ち続けることは、現実の社会においては困難なことも多いであろうが、Gさんが語るように理想論と言われても、みんな求めているし、また求め続けていくべきであるという彼女の思いが感じられた。「美しき心」とは、抽象的に感じられる言葉であるが、実際はとても強い意味合いを持った言葉であろうことが伺える。

また、今回の調査では理想の女性像として、「全体人間」というキーワードが数人の対象者から出てきたので、紹介したい。

「『新・人間革命』第17巻の『希望』の章を読んで思ったことですが、あの当時、(池田)先生が創価女子学園を良妻賢母を育てるための学園と言われた記憶がゼロなんです。女性というものは、将来結婚して、子供産んで…みたいな話をしたことはない。人間としてどうあるべきか、全体人間が大切という一点だったと思います。当時の女子教育の一つの流れは良妻賢母だったので、全然違う。自分の主体性、主義主張を持っている女性を育てる。でも、下手に男勝り、フェミニズムみたいなでもない。男性と争うのでもなくね。」(Bさん)

「人間としての生き方。自分も更年期とか、いろいろ経験して。海外で就職もしました。その頃は雇用均等法の第一世代で、日本においては、本社は総合職と事務職に分かれていました。外資系が一番その垣根が低かった。その後、結婚し、出産して、職業も変えて、フリーランスの通訳として働くことになりました。そこで、自分自身が創価教育を受けてきて、何を示せるんだろうと思った——私が示せるのは、人間としての生きざまだと思った。私たちの世代は高校出てすぐ就職して結婚する友人もたくさんいたから。『新時代の女性』と先生が言われたことを思い出している。(仕事か家庭の)どちらかに

⁽²⁴⁾「創立者とともに」編集委員会 編 『創立者ととともに』、408頁。

偏るのではなく、女性であることも活かし、自分の能力を活かすことが全体人間なんだと。それを後世の人たちに示していくことが必要だと思う。」(Bさん)

「私にとっては、全体人間がテーマ、モチーフ。結婚、出産したら、キャリアに影響する。なんで女性だけ？　と思うけど、今ふり返ったら女性でよかったなと思います。男性は全体人間と呼べるような深さが無い。女性は多面性を持っている。男性は仕事≡(ほぼイコール)幸せだけど、女性は幸せといっても、人それぞれ違う。どれが欠けても幸せじゃない。仕事で成功しても、もし子どもが不登校だったらかどうか。例えば、子どもの歯が一本抜けるだけでも、不完全さにうちのめされてしまったりね(笑)。娘のことで、ショックだったんです(笑)。そういうふうに、何か一つ欠けても幸せじゃないってわかっていることも素晴らしいと思う。多角的に人生を生きていけるし、楽しめる。だから強くなるんですね。子どもがいることで自分の身を投げ出しても守ろうと思う命があるのありがたい。そういうふうな経験ができたのはありがたいと、理屈抜きに思える。」(Bさん)

Bさんは、「女性であることを活かし、自分の能力を活かす」ことが大切であると語っている。社会人として、妻として、母として多角的に人生を生きることの価値についてもふれており、「何か一つ欠けても幸せじゃないってわかっていること」自体が素晴らしいと語っていた。彼女のような視点は、実際に仕事と家庭を両立させている女性ならではの視点と言えよう。

「第一回入学式の終了後、池田先生とテニスの試合をしていただきました。学園生に1点もゆずらず、先生チームが5セットゲームのうち、3セットストレート勝ちです。そのあと、大きな鉄棒の下で『誰か大車輪できる人?』と聞かれましたが、誰もできません。『なんだ、誰もできないのか?! 先生が小さいころはよくやったんだよ』と言われました。びっくりしました。女子学園生に聞かれることとは思えなかったからです。このことを通じ、どんなことにも挑戦する全体人間をめざす女性に成長することを望まれているのだと思いました。」(Iさん)

Bさんは、池田の指導の特徴として「全体人間」をあげている。また、Iさんも「どんなことにも挑戦する全体人間」という言葉を用いており、これらの語りから、対象者たちが「全体人間」を一つのモデルとして考えていることが伺える。そこで、全体人間とはどのような人間のことをさすのか、考察してみたい。小説『新・人間革命』の中で、主人公の山本伸一が創価女子学園の設立時に女子教育のありかたについて思いをめぐらせる場面で、池田はめざすべき女性像についてこう記している。

「彼は、めざすべき女性像についても、以前から思索をめぐらせていた。

—— 従来、日本の女性教育にあつては、多くは『良妻賢母』が、その理想とされた。だが、家事をやっていればよいという生き方では、人類の悲願である平和実現に寄与する大きな力とはなりえない。広く社会的な見識と、人生についての英知をもち、地域を、社会を舞台に活躍していける女性でなければならない。

しかし、だからといって、家庭など捨てて、職業婦人として自分の専門分野で力をつけられればよいというものでもない。要請されるのは、家事であれ、仕事であれ、立派にこなし、豊かな個性をもち、文化や政治などの社会的な問題に対しても積極的に関わり、創造的な才能を発揮していくことのできる人である。つまり、なんでもこなしていける“全体人間”である。それこそが、これからめざす女性像であ

る——。

伸一は、こう考えたのである。』⁽²⁵⁾

ここから、池田が全体人間として豊かな見識と幅広い教養を持ち、地域社会へ貢献しうる女性を志向していたことが伺える。他にも、創価大学での池田の指導の中で「全体人間」に言及したものをあげると、以下のような定義づけがなされていることがわかる。池田は、1964年の創価大学設立構想発表の際に、すでに「全体人間」という言葉を用いて、大学の目指すべき人材像を表現している。彼は、創価大学の建学の精神の一つである「人間教育の最高学府たれ」というモットーについて言及し、「創価大学は、あくまでも社会を動かし、社会をリードしていく英知と創造性に富んだ、全体人間をつくっていく学府でなければならない」⁽²⁶⁾と述べている。さらに、第11回創価大学入学式の指導で、人間教育と全体人間について「人間教育は、内的生命を開発することによって『完全な人間』『全体人間』を目指すべきであるというのであります。それには何が必要かといえば、第一に豊潤なる感受性、第二に明晰な知性、第三に強靱な意志力、精神力である。」⁽²⁷⁾と述べており、この3つのうち、どれ一つとして欠けてはならないと主張している。ここから、全体人間とは、知性や人格、精神力や感性といった特質のバランスが取れた人間であり、なおかつ社会に貢献しうるリーダーシップを備えている人間像が推測されよう。

3. 考察・まとめ

① 女子教育の特徴

本研究では、創価女子学園の卒業生へのインタビューを通して女子教育の良さや、幸福観、理想の女性について考察することを目的とした。

女子教育に特有の指導については、3つのモットーである「良識・健康・希望」を学べる、嫉妬ややかみがない、女性としての生き方に特化した指導を受けることができた等の語りが見られた。男子と共通の指導としては、「師匠を持つこと」という観点があげられた。また、女子教育の良さとしては、以前のインタビュー調査でも出てきた回答である「自立できる」「のびのびと個性を伸ばせる」という観点のほかに、「純粋さ」「一途さ」についての語りも見られ、創立者の池田を師匠として求めていく姿勢が示されていた。

創価女子学園での先輩と後輩の関係については、多くの対象者から「仲が良かった」「常に後輩のためにと思っていた」「いつでもその頃に戻れる」等の回答がみられた。また、自身の立場が結婚や就職などによって変動しやすい中であって、中学・高校時代に築いた友情が卒業後も長く続いている様子を伺わせる語りも見られ、「奇跡の連帯」とも呼ぶべき卒業生たちの絆を感じた。また、姉妹の連帯ともいわれるように、先輩は後輩を妹たちと思い、後輩のために力を尽く

⁽²⁵⁾ 池田大作 『新・人間革命』第17巻、112-113頁。

⁽²⁶⁾ 創価大学自治会 編 『創立者の語らい I』、創価大学自治会、1995年、31頁。

⁽²⁷⁾ 創価大学自治会 編 『創立者の語らい II』、創価大学自治会、1995年、35頁。

している様子が見られるなど、お互いを思いやる協調的な人間関係が草創期の創価女子学園で築かれていたことが伺えた。教員と生徒との関係も、共に創立者を求める「同志」のような関係であったとの語りもあった。通常の教師と生徒の上下関係にとどまらない、創立者を持つ私立の学校ならではの観点だといえよう。

② 幸福観と全体人間への志向性

幸福観については、「幸せを感じる感受性を強くすること」「負けないこと」「人の役に立てること」「感謝できること」という観点が見られた。また幸福とは「人に頼らないこと」「使命に生きること」であるという語りもみられ、人から与えられるものではなく「自分で勝ち取るもの」という語りからは、人生を受身的ではなく積極的にとらえる姿勢が伺えた。「他人の幸福を喜べる」という観点は、自他ともに幸福を志向する精神を表しているといえよう。

理想の女性像については、香峯子夫人をはじめとして「良識、健康、希望を備えた女性」「和を保つ人」という周囲の人々との人間関係を温和に保つことのできる対人能力の高さに言及した語りが見られた。さらに、上記の幸福観にも出てきた「人の役に立つ人」「庶民のリーダー」という語りや、幸福は「自分で勝ち取るもの」という観点とも一致する「まわりに粉動されずに、自分で幸福になっていく女性」という語りも見られるなど、自分の意志をしっかりと持って、それを貫く女性を一つの理想にしている様子が伺えた。1期生の卒業指針にもある「美しき心」を持つ人という観点もあげられていた。

また、池田の指導には「女性」としての指導よりも、「一個の人間」としてどうあるべきかについての指導が多かったという回答が見られ、その中で「全体人間」への志向性についての語りが見られた。これは今回の調査で明らかになった観点といえよう。女性だからと小さく画一的な見方に限定されるのではなく、女性の特質を生かしながらも、知性、人格、精神性などのバランスのとれた人間、また社会へと貢献する人間を一つの理想として卒業生たちが考えていることが示されたといえる。

今回のインタビューでは、女性が一つのキーワードであったものの、最終的には、女性というよりも「人間としての生き方」に着目することとなった。創価女子学園での教育は、もちろん女性としての特質である良識や福運といった要素を重視するものの、その核になる理念は「一個の人間としての生き方」「全体人間への志向性」なのではないかと筆者は考える。卒業後、30年以上経過した現在においても、対象者たちが彼らの人生の原点が創価女子学園にあったこと、なかでも創立者の池田との出会いにあったことを熱く語る姿は、筆者にとっても感銘を受けるものであった。密度の濃い3年間、また6年間を共にした卒業生たちの絆は現在も続いており、美しい友情の連帯が育まれていることが示唆される有意義なインタビューとなったことをここに記したい。

【謝辞】

本研究をおこなうにあたり、快く調査にご協力いただいた9名の調査協力者の皆さまに心より感謝申し上げます。長時間にわたってのインタビューにご協力いただき、御礼申し上げます。